

# スクラブル

福島県 富岡町商工会

## 商店街に子供たちの絵を 街角ギャラリーを起爆剤に

富岡町商工会と富岡商店街協同組合は、1月20日から、町内の中央商店街で各店舗に児童の絵を飾る「街角ギャラリーinとみおか」を開催した。

子どもの創作意欲向上、文化の薫りがする町づくり、商店街活性化の“一石三鳥”をめざす取り組みとして企画された。

中央商店街約800mに並ぶ27店の店先に、富岡一、富岡二両小学校の児童や町内の絵画教室に通う子どもたちが描いた水彩画、版画などを、「イーゼル」に2枚ずつ掲げた。買い物客らに絵画鑑賞を楽しみながらショッピングしてもらう。

中央商店街は明治時代から同町のメインストリートとして

にぎわってきたが、近年、空き店舗が増えてきたことから、商工会と富岡商店街協同組合が企画したもの。作品が多くの人目にふれることで、子どもたちの励みにもなり、教育的価値も高いとして、こども未来財団と富岡町教委が協力した。



商店街のほぼ中心にある富岡商店街協同組合事務所に30点を展示したほか、富岡郵便局や各金融機関、昨秋開館した町文化交流センター「学びの森」、保養施設として町外からの来場者も多い「リフレ富岡」などで、2月10日までに展示した絵画は合わせて約270枚。

県内でも珍しい取り組みで、今後も定期的に催す方針だ。

商工会理事の菊地成一さんは「子どもたちの力を借りながら、文化の薫りがする町づくりを進め、商店街活性化にもつなげたい」と話している。

富山県 福岡町商工会青年部

## 安全・安心は地域から

青年部がパトロール隊

福岡町商工会青年部員が福岡防犯隊・ふくおかセーフティーネットを結成し、12月から活動を開始した。パトロールは夜間に車で町の全域を回るもので、JR福岡駅前やコンビニ、新興住宅地などを重点的にチェックする。



パトロール前に重点チェック箇所などについて話し合う隊員

部員は全員で60人。早朝や夜間勤務で日中に時間の余裕のある部員もおり、昼のパトロールもできる。若さを生かした活動ができるのでは、と期待する防犯関係者も多い。

部長の片原成範さんは「青年部は地域の振興を活動目的にしている。そのためには安全の確保が第一。部員以外の人にも協力を呼びかけ、活動の輪を広げたい」と意気込んでいる。

宮崎県 木城町商工会女性部

## 春には満開の花を

フラワーフェスタに向け植栽

木城町商工会女性部（壱岐泰代部長、31人）は1月15日、3月20日から県内各地で開催される「みやざきフラワーフェスタ2005」のスタンプラリー会場である木城温泉館「湯らら」に、花の苗約8,000本を植えた。



植栽には部員と「湯らら」職員約20人が参加。敷地内の約2.5aに、約1時間半、和やかに談笑しながらパンジー、キンギョソウ、ノースポールの苗を1本1本丁寧に植えた。

3月から5月にかけて、満開の花々が来場者の目を楽しませることになる。

壱岐部長は「春にはきれいな花を見て、ゆっくり温泉に入って、心身を癒やしていただきたい」と話していた。

高知県 土佐山田町商工会

## 地震での圧死を防ごう

家具固定装置を共同開発、年内発売へ

地震時の家具転倒による被害を防ごうと、香美郡土佐山田町商工会工業部のメンバーで構成する「一水会」（依光陽一郎会長）が、家具を固定するベルトなどを開発した。1月24日には、県立森林技術センターで、起震装置を使って耐震性をチェックした。

異業種間の交流を目的に15年ほど前に結成された同会は、互いの技術を生かし、これまでも「くじらないふ」や「土佐山田えびすのぼうしパン」などの商品開発に取り組んできた。

今回の転倒防止装置の開発は、鍛造業の和田和親さんが提案。阪神大震災では、倒れた家具の下敷きになった被害が多かったことから、「南海地震に備えた商品を作りたい」と同センターと共同で試作品を進めてきた。

メンバーは「人的被害の抑制に役立てたい」と話している。

家具を壁に固定する装置は各種市販されているが、和田さんらは「壁は内部が空間になっている箇所が多く、壁ごと倒れる恐れがある」と予想。家具を柱やかまもいにベルトで固定する装置など、3種類を開発した。



実験は同センター内に壁や柱を設置し、起震装置を使って実施された。たんすやテレビにベルトや鉄製の金具を装着し、震度5弱から6強までの揺れを1分間続けて耐震性をチェック。家具は前後に大きく揺れたものの、震度6強まで持ちこたえた。

和田さんは「家具が倒れて圧死するという最悪の事態を避けようと研究を重ねてきた。実験結果をもとに改良を加え、年内の発売を目指したい」と話している。

## 茨城県 大洋村商工会 交流拠点づくり事業で健康体操 村のノウハウ総動員

大洋村商工会(倉川陽好会長)商業部会(小島賀津也部会長)が進めてきた「くらしサポート情報マップづくり」に続く地域づくり・商店街活性化対策第2弾「交流拠点づくり事業」が、村内4小学校区すべてで実施された。200人のお年寄りが村独自の健康体操を実践し、健康づくりのねらいで作った昼食をとるなどして、和やかにすごした。

この事業は、2002年、県商店街競争力強化推進事業の指定を受けてまとめた宅配サービスシステム計画策定事業の報告書の中で提言した村商業活性化策の4つの提案の1つ。

同部会では、「地域と共に健康で明るく」をテーマに、小学校区ごとの公民館を、地域住民のイベント、村特産品を用いた料理教室などの場として活用することを発案した。村独自に考案された健康体操や健診システムを有効利用し、健康に配慮した

特産品を使った手作り昼食を用意するなど、村内の既存ノウハウを一体化して活用することで、活動資金を最小限に抑えたという。

第1回は10月28日に札公民館で開かれ、健康体操教室では骨密度の測定、脚筋力測定、体脂肪計での測定を実施。かやくごはん、おひたし、根菜類のけんちん汁などで昼食をとり、琴の会の演奏や切り絵などを習った。第2回は梶山集落センターで行い、参加者全員で童謡を歌った。第3回は下沢集落センターで、アートフラワーでのカーネーション作り。最後の4回目は、濁沢集落センターで「相馬盆歌」や「炭坑節」などを楽しんだ。

同商工会では「町村合併を控えているが、来年度も内容を充実し、ステップアップしていきたい」と意欲的だ。



## 石川県 辰口町商工会青年部 先端大生ら酒蔵を見学 産学連携の交流事業を推進

辰口町商工会青年部では昨年、北陸先端科学技術大学院大の知恵を地元商店街の活性化に生かそうと、学生との交流を始め、町のイメージをテーマに話し合ったり、町の各種行事に招待するなどしてきた。



1月22日には、身近な産学連携を目指した交流事業で、学生に日本の文化に親しんでもらいたいと学生ら30人を町内の酒蔵に招待し、歓談するなどして交流を深めた。

中国、ベトナムなど7カ国の学生が、町内の宮本酒造を訪れ、酒蔵や日本酒ができる工程を見学。夕食パーティーでは、すき焼き鍋と日本酒を味わった学生たちから「日本の食文化に触れることができた」「辰口に日本酒を作っている場所があるとは知らなかった」などという声が聞かれた。

善田善彦青年部長は「地元の良さを知ってもらうため、今度はぜひ辰口温泉に入ってもらいたい。能美市移行後も交流の輪を広げていきたい」と話している。

## 熊本県 大津町商工会女性部 国道を花で彩る 女性部と国交省が協定

国土交通省熊本河川国道事務所と大津町商工会女性部が、道路の美化活動を進める「ボランティア・サポート・プログラム」協定を締結した。このプログラムは国交省が2000年から取り組んでいるもので、協定は県内で10件目。



12月22日には商工会館で締結式が行われ、安藤淳・同事務所長、永田ミユキ・町商工会女性部長が協定書に調印した。活動区間は国道57号上り線(大津バイパス)大津交差点付近の約60m。

協定では、女性部が花壇に季節の花を植え、歩道清掃にも協力する。国交省は清掃用具や安全ベスト貸与、花苗代や活動中の保険料を負担するなどの支援をする。

女性部は91年からJR肥後大津駅南側の花壇整備などに取り組んでおり、今年8月には日本道路協会会長表彰を受けた。協定締結後には、さっそく女性部や商工会役員らが、パンジーの花苗やチューリップの球根を植えた。永田部長は「気持ちを新たに頑張りたい」と話している。

## 秋田県 八森峰浜商工会 統一ブランド売り込もう 白神の知名度生かし

八森峰浜(はちもりみねはま)商工会(大森三四郎会長)は2月7日、「白神/八森峰浜JAPANブランド」の統一ブランドの特産品を首都圏に売り込む「白神・八森峰浜の恵みフェア」を、横浜市の横浜ベイシェラトンホテルで開いた。

ブランド化事業は昨年6月、地域特産品を国内外に売り込む中小企業庁の「JAPANブランド育成支援事業」に認定され、商工会と県総合食品研究所などが連携して取り組んできた。

フェアでは、首都圏の食品卸・小売店などの担当者を招き、フェアに合わせて商品開発した14品を含め、ギバサ(海藻)の粘り成分を生かした「ねばりっこドレッシング」、黒豆を原料にした「黒豆とうふ」、無農薬のイチジクを使った「無花果の甘露煮」、工芸品では白神のブナ林の写真を張った「白神ひば

木製ミニ屏風<sup>びょうぶ</sup>など、31品がお披露目された。パッケージには、白神山地や日本海のイラスト、「白神」の文字が入った統一ロゴマークが印刷され、いずれもユニークなもの。都内の食品卸会社の担当者は「なかなか面白い商品がある。白神のブランド名は、商品を手取る一つのきっかけになるのでは」と話していた。



大森会長は「八森町と峰浜村の特産品は、白神山地の水や空気をたっぷり吸い込んでいる。世界遺産の知名度を生かし、首都圏をターゲットに浸透を図りたい」と話した。

会員各社は商品販売による収益の1%を、商工会は各社から受け取るロゴマーク使用料の一部を、それぞれブナ植林資金などとして地元自然保護団体に寄付する予定。商工会では「収益の一部を自然保護に役立て、産業と自然の共存も図りたい」と考えている。